

お墓の入り方と 出方の作法について



●Answer

沖縄市・コザ山 球陽寺 前住職
帰依 龍照 (きえ りゅうしょう)

Q 近々、亡くなった父を納骨する予定です。

そのとき、お墓の入り方と出方があると、親戚のおばさんが教えてくれました。これには兄弟みんなビックリ。まさか、そこまで沖縄にはしきたりがあるのでしょうか？

(名護市Kさん、50代、男性)

A Kさん、親戚のおばさまがおつしやるように、

沖縄の地域や家庭によってお墓の入り方と出方には作法があるといえます。頭もしくはお尻から入り、頭またはお尻から出る作法です。この頭とお尻のように、沖縄では対極的な正反対のしきたりや数多く存在します。例えば、重箱のお箸を割る場合と割らない場合のように、それだけ二つのしきたりに意味づけをしなから、ウヤファーフジのご先祖を大切に敬っている証しなのだといえます。

それでは、それぞれにどのような考え方があるのかご説明しましょう。

お墓に入る作法

お墓の中へ、チュブル(頭)から入るしきたりは、沖縄の代表的な挨拶「メンソーレ」に係るといふ方がいます。メンソーレを言いかえますと面候(めんそうらえ)。つまり、頭から入り、ご遺骨のカーミに面と向かうことで、ウヤ

ファーフジを拝しながら丁寧に挨拶を行うということなのでしょう。

また、お墓の中へチビ(お尻)から入るしきたりは、ウヤファーフジのご先祖など尊い方々に対して、直接、面と向かい、お顔を拝することは失礼にあたるという理由からだとかがったこともあります。恐れ多くも、殿上人(てんじょうびと)の前に、目隠しでもある、御簾(みす)の簾(すだれ)を下げるのと同じ意味だともいえます。直接、お顔を見ないことが、敬意を表すという考え方なのでしょう。単に、頭から、お尻からは、入りやすいことを最優先したから、というお話も耳にしたことがあります。いずれも、ありがたい作法であることに相違ありません。

お墓から出る作法

同じように、お墓から出るときにも作法があり

- ①頭から入って頭から出る
- ②頭から入ってお尻から出る
- ③お尻から入って頭から出る
- ④お尻から入ってお尻から出る

の4つのケースがあります。

このうち、お墓の入り方と出方を区別するため、多くの地域が②か、③の作法になるといえます。

頭から出る場合、お墓の中のグソーには長居をせず一刻

も早く出るため、顔を出口に向けるとの考え方がありといえます。お尻から出る場合、ウヤファーフジにお顔を向けつつ、グブリーサビラと敬意を表するため、お尻を中へ向けず、出口に向けるとの考え方がありともいえます。

いずれの入り方や出方を選択するかは、親戚のおばさんや先輩方にムンナレーという、もの習いしなから判断されると良いでしょう。判断に迷うようであれば、頭から入り、お尻から出る地域や家庭のケースが多くありますので、参考にしていただければと思います。

サン(祭具)の作法

お墓から出るとき、「サン」という薄(すすき)を3本結んだ祭具を使用することがあります。その使い方は、時計周りに3度、クルクルと大きく回しながら出るといったイメージです。また、別の地域や家庭では、お墓の中から出てきた人の左肩を3回、サンで軽く叩くこともあります。これらの作法は、ウヤファーフジのご先祖の世界と、私達の世界を、サンを使うことにより、敬いながら区別するためだといえます。

先日、とある家庭のお墓参りでのこと、このサンの準備をおばあさまが20代のお孫さんに依頼しました。お墓の周

辺に生えている薄を、3本切ってちょうだいの意味だったのでしょね。「サン小(グワー)、二つお願いしようね」のおばあちゃんからのご依頼に、「まだ10時になってないし、ホームセンターが開いたら買ってこようね」と、お孫さんが即答されていました。「10時」「ホームセンター」つまり、薄のサンではなく、多分、障子などのサンのことを言われていたのでしょうか？

サン違いの勘違いをされたのでしよう。

ちなみに、サンは薄を3本結ぶことから、3本の数字の3が、サンという名前の由来になったともいわれています。

